

「税金は「優しさのバトン」」

福岡教育大学附属福岡中学校

畑瀬 由衣

「レモネードはいかがですかー。」

アメリカで始まったレモネードスタンド。寄付を呼びかけ、協力してくださった方にレモネードを配る活動だ。私はこのレモネードスタンドで、約半年前からボランティアをしている。それは「福岡に『子どもホスピス』を作る」ため。子どもホスピスとは、小児がんや先天性疾患など重い病気や障がいを持つ子どもとその家族を支える施設である。決して死を待つような暗い場所ではなく、子どもの学び、遊び、やってみたいことを一緒に叶え、家庭的な環境で豊かな時間を過ごせる「第二の我が家」だ。張り詰めた日々を過ごす家族にもひとときの休息がもたらされる。私は、大阪の子どもホスピスについて書かれた本でその存在を知った。「例え病気や障がいを持っていても、こんなに輝いて、親も子も心から楽しめる場所があるなんて」それからしばらく「子どもホスピス」という言葉が頭から離れなかった。私自身も私の家族も、重い病気にかかった経験があるわけではない。しかし、「重い病気と闘う子どもたちにとって、絶対に必要な施設だ」と確信した。それから私は「福岡子どもホスピスプロジェクト」でボランティアをするようになった。実は、病院併設型でない子どもホスピスは、日本には大阪と横浜の二か所しかないのだ。福岡にも子どもホスピスを絶対作りたい。あの本を読んでから、私のその思いは変わらない。

ただ、課題は山積みだ。特に費用面では、建設や運営に必要な億単位の費用を、全て寄付で賄う必要がある。「どうにかできないのだろうか・・・」インターネットで情報を集めていたところ、私の目にある記事が止まった。それは、横浜の子どもホスピスについて書かれた記事だった。横浜の子どもホスピスは、なんと横浜市が七二七平方メートルの土地を30年間無償で貸し付け、5年間は年500万円を上限に人件費を補助しているそうだ。衝撃だった。子どもホスピスは民間施設なのに、市がこんな助成をしてくれているなんて。

子どもホスピスを支える、その助成金は、国民が納める税金によって賄われている。税金が子どもホスピスを、そしてホスピスを利用する子どもたちを支えているのだ。このような税金の仕組みが、どれだけ建設から運営までの大きな力となったであろうか。もっと、当たり前前のような優しさあふれることに税金が使われる社会になるべきだと思う。

私たち国民が、日常的に納める税金。税金を通して、納税者から、見えない誰かに、たくさんの優しさというバトンが繋がれていってほしい。誰もが笑顔で毎日を過ごせるように。税金が「優しさのバトン」であり続ける、そんな世の中にしていきたい。

これからも私は、レモネードスタンドに立ち続ける。プロジェクトの一員として、中学生の私でも、子どもたちのため、世の中のために、できることはたくさんあるはずだ。